

〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉

——イブン・カイイム『求道者の階梯』「グルバ章」の
翻訳および解題「付」アンサーリー・ハラウイー『旅路
を行く者』「グルバ章」

石 郷 岡 宏 記

序

本稿は、翻訳の底本とした『奇妙なものと奇妙な者たち』に収録された一連のテキスト群のなかから、ハンバル学派のイスラーム学者イブン・カイイム・ジャウズィーヤ (d. 750/1351) が著した『^{マダーリジュ・サーリキーン}求道者の階梯』の「グルバ章」を全文訳出したものである。『求道者の階梯』グルバ章は、ハンバル学派の神秘主義者アンサーリー・ハラウイー (d. 481/1089) の著書『^{マナーズィル・サーイリーン}旅路を行く者』の「グルバ章」を註釈する形で書かれており、それを鑑みて本稿には、アンサーリー・ハラウイー『旅路を行く者』第77章＝グルバ章を訳出した補遺を末尾に付した。なお、底本とした『奇妙なものと奇妙な者たち』には、イブン・タイミーヤ (d. 728/1328) とシャーティビー (d. 790/1388) による論考も収録されているが、前者についてはすでに中田考による訳業と拙訳がある¹。後者シャーティビーの翻訳については稿を改めたい。本稿はこの序文に続き、イブン・カイイムの論考を訳出した第一部、アンサーリー・ハラウイーの翻訳を付した補遺、訳者解題を叙した第二部より構成されている。

凡例

- 一、翻訳には底本として、Ibn Qayyim al-Jawziyah. “Kalām Ibn al-Qayyim fī al-Ghurba wal-Ghurabā,” in *al-Ghurbah wal-Ghurabā*, Salim ibn ‘Id al-Hilālī (ed.), Dammam: Dār al-Hijrah lil-Nnashr wa al-Tūzī‘ah, 1989. PP.61-82. を使用し、Ibn Qayyim al-Jawziyah. *Madārij al-Sālikīn bayna Manāzil Iyyāka Na‘budu wa Iyyāka Nasta‘īn*. Beirut: Resalah Publishers, 2014. PP.890-899. と符号した。
- 一、クルアーン、ハディースともに全文拙訳を使用した。クルアーンは中田考監訳『日亜対訳クルアーン』（作品社、2014）を主に参照したが、適宜訳し変えた箇所もある。
- 一、可能な限り原典の文体を損なわないよう逐語的に訳したが、日本語として通用しない語彙や表現などは自然な表現に改めた。
- 一、文中で意味を補った（ ）及び、文章を補った [] 内の補足は筆者によるものである。

第一部：翻訳

イブン・カイイム・ジャウズイーヤ『求道者の階梯』「グルバ章」

第一節

イスラームの師は「グルバ章」で次のように述べている²。

至高なるアッラーは言われた。「それで汝より前の世代には、地上の荒廃を禁ずる卓越性の持ち主はいなかったのか、彼らのうちわれらが救い出した少数の者のほかには (11:116)」。

至高なるアッラーは言われた。「それで汝より前の世代には、地上の荒廃を禁ずる卓越性の持ち主はいなかったのか、彼らのうちわれらが救い出した少数の者のほかには (11:116)」。

本章では、この章句において彼が参照したことは、知、真知、クルアーン理解が確かであったということを以下に示していく。真に奇妙な者たち³は、この世界において、この章句で述べられているような性質をもっている者たちなのである。それらは、使徒（彼に平安と祝福あれ）が言われた次のことが明らかにしている。

「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者が尋ねた。「アッラーの預言者さま、その奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」

預言者は答えた。「それは、人々が腐敗したときにそれを正す者たちのことです⁴」。

また、イマーム・アハマド⁵は述べている。アル＝ムッターリブ・ブン・ハンタブが、アムル・イブン・アブー・アムル——アル＝ムッターリブ・ブン・ハンタブの召使い——に伝え、それがザヒールに伝わり、アブドゥッラフマーン・ブン・ムハッディーが伝えたハディースによると、使徒（彼に平安と祝福あれ）は言われた。

「奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者達が尋ねた。「預言者さま（！）ではその奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」

預言者は答えた。「それは、人々が欠けたときに増やす者たちのことです」。

たとえこのハディースが上記の文言によって記憶されているとしても、ある伝承者の伝聞では〔意味が〕逆転していない——曰く、「人々が増えたときに減らす者たちのことです⁶」——。つまりこの意味は、人々が欠けているときに、善、信仰、敬虔さにおいて増やす者たちのことなのだ。アッラーは存じられよう。

またアブドゥッラー・ブン・マスウードが、アブー・アル＝アフワスに伝え、アブー・イスハークに伝わり、アル＝アムシユが伝えたハディースによると、アッラーの預言者（彼に平安と祝福あれ）は言われた。

「真に奇妙なものとしてイスラームは始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものへと戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者が尋ねた。「アッラーの預言者さま、その奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」

預言者は答えた。「それは、部族のなかで衝突する者のことです」⁷。

アブドゥッラー・ブン・アムルのハディースによると、——ある日、われわれが使徒のもとに行ったときに、使徒（彼に平安と祝福あれ）は次のように言われた。

「奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者が尋ねた。「アッラーの預言者さま、その奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」預言者は答えた。「それは、大多数の人々のなかの少数の善い者たちのことです。むしろ彼らに背く者たちは従う者たちよりも多いことでしょう」⁸。

アハマドは述べている。アル＝ハイサム・ブン・ジャミールのハディース、ムハンマド・ブン・ムスリムのハディース、及び、アブドゥッラー・ブン・アムルが、スライマーン・ブン・ホルムズに伝え、ウスマーン・ブン・アブドゥッラーが伝えたハディースによると、使徒（彼に平安と祝福あれ）はこう言われた。

「真にアッラーに最も愛されるのは奇妙な者たちである」。

ある者が尋ねた。「奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」

預言者は答えた。「それは、宗教を以て逃れ、最後の審判の日にマルヤムの子イサー（彼に平安あれ）のもとに集まっていく者たちのことです」⁹。

また、別のハディースにはこうある。

「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ」。

ある者が尋ねた。「アッラーの預言者さま、その奇妙な者たちとは何者なのでしょうか？」

預言者は答えた。「それは、わたしのスンナを蘇らせる者です。そして人々はそれを知るでしょう」¹⁰。

また、ナーフィア・ブン・マーリクはこう伝えている。

ウマル・ブン・ハッターブは、モスクに入ったときに使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の家の方を向いて、ムアーズ・ブン・ジャバルが坐っているのを見かけた。彼は泣いていた。

ウマルは彼に訊いた。「アブー・アブドゥッラフマーンよ、何故泣いているの

ですか？もしや、あなたの兄弟が亡くなったのですか？」

彼は言った。「違うのです。そうではなくて、預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が、私がこのモスクにいるときに話してくれたハディースのためののです」。

彼は訊いた。「それはどのようなものなのですか？」

彼は言った。「真にアッラーは罪がなく、敬虔で、親切で、隠れた者を愛される。もし彼ら〔の姿〕が見えないとしても失われているわけではなく、また見えているときであっても〔人々に〕知られていない。彼らのところは導きの提燈であり、暗闇の内乱のときに現れるのです」¹¹。

これらの者たちが、褒められるところの、羨むべき奇妙な者たちなのである。彼らは非常にすくないことから「奇妙な者たち (ghurabā^グ、少数派)」と呼ばれる。ゆえに多くの人々はこの性質をもたないのである。

だから、人々のなかにあつて、イスラームの民は、奇妙な者たちなのである。

そして、イスラームの民のなかでも、信仰者たちが奇妙な者たちなのである。

そして、信仰者たちのなかでも、知を持つ者が奇妙な者たちなのである。

そして、知を持つ者のなかでも、スンナの民——スンナといものを我執と異端から区別する者——が奇妙な者たちなのである。

またそれを呼びかける者、〔スンナに〕反する害悪に耐える者、これらの者こそがその奇妙さにおいて最も激しいのだ。

そして、これらの者こそが真にアッラーの民なのである。この奇妙さは彼らにとって悪いものではなく、多数派のなかで少数派であるというだけのことなのだ。威光高き偉大なるアッラーは言われている。「汝がもし地上の多くの者に従うならば、彼らは汝らをアッラーの道から迷わせるであろう (6:116)」。

〔ここで言われているアッラーが迷走させる〕彼の人々は、アッラーとその使徒、その宗教から遠ざかっている。たとえ彼らが〔人々に〕知られていたとしても、彼らの奇妙さというのは単に疎遠であるというだけの奇妙さなのである¹²。次の詩に言われているように。

家から離れている者が 奇妙なのではない

そうではなく 彼から離れている者が奇妙なのだ¹³

falaysa ghaliban man tanā'at diyāruhu

walākinna man tan'ayna 'anhu gharību

ムーサー（彼に平安あれ）がファラオの民と手を切つて逃れたとき、アッラーが言われた場所、マドヤナに辿り着いた。彼は孤独で、余所者で、怯えており、

また空腹であった。そして言った。

「ああ、主よ、〔私は〕孤独で、病気で、余所者^{ガリーフ}です」。

するとアッラーは言われた。「ムーサーよ、孤独な者とは、われのように親しい者がいない者である。病気の者とは、われのように医^{いやく}し手がない者である。余所者とは、われとその者のあいだに関係がない者である」。

奇妙さの種類

奇妙^グさ^ルには次の三つの種類がある。

奇妙^グさ^ルとは、人々のなかでも、アッラーの民と預言者のスンナの民が持つものであり、アッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）はそれを持つ者を称賛している。彼は、彼がもたらした宗教を「奇妙なものとして始まった」そして「それはまた始まりのような奇妙なものに戻るだろう」と伝えている。だから、その民は奇妙な者たちになるのである。

そしてこの奇妙^グさ^ルとは、ある場所にはあるがない場所にはない、またある時にはあるがない時にはない、そしてある民のもとにはあるがない民のもとにはないものなのである。

とはいえ、この奇妙な民こそが真にアッラーの民なのである。だから彼らはアッラーのもと以外には帰らず、預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）以外には帰属しないのだ。ゆえに、人々が最後の審判のときに神々について行くときにも、自分たちの場所に留まるのである。

「人々は〔神々に〕ついて行ったのに何故お前はついて行かないのか？」彼らは言った。

「〔偽りの神々は〕今日、彼らを必要としているが、われわれは、われわれの死を待っているのです」¹⁴。

つまり、この奇妙^グさ^ルは、それを持つ者にとって害のある孤独ではない。だから、人々が孤独であるときには彼は最も親密であり、人々が寛いでいるときには彼の孤独は最も激しい。人々の多くが彼に敵対していたとしても、彼の親密な相手はアッラーとその預言者、信仰する者たちなのである。

アブー・ウマーマがアル＝カースィムに伝えたハディースによると、使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は、至高なるアッラーについて言われた¹⁵。

「真にわたしの仲間^{ムサ}のなかで最も羨むべきものは信仰者である。彼らは背中が軽く、礼拝の分け前を持っており、主の崇拜を最もよく行い、手には一握りの糧があり、人々のなかにあってそれらを持っていても目立たず、他人に後ろ指を指されることもなく、アッラーに見えるまでそれに辛抱する。そうすると彼の希望は成就し、負債はすくなく、嘆きもすくない」¹⁶。

では、これら奇妙な者たちとは何者なのか？ その者は、アナスが伝えている使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）のハディースでこう云われている。

「髪はみだれ、埃にまみれ、襤褸をまとい、誰も見向きもしない。だが、アッラーに対して誓えば、それを成就させることができる者です」¹⁷。

また、ムアーズ・ブン・ジャバルがアブー・イドリース・アル＝ハウラーニーに伝えたハディースによると、使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）はこう言われた。

「天国の民の王について教えましょうか？」

ある者達が言った。「ええ、アッラーの預言者さま」。

預言者は言われた。「弱々しくて、埃にまみれ、襤褸をまとい、誰も見向きもしない。だが、アッラーに対して誓えば、それを成就させることができる者です」¹⁸。

またアル＝ハサン¹⁰は述べている。「信仰者はこの世において奇妙なものである。絶望に悲嘆しないし、栄誉を競わない。人々は或る状態にあり、彼も或る状態にある。人々は彼がいても〔気にも留めず〕快適であるが、彼自身は自分に対して苦しんでいるのだ」。

預言者が満足されるような、彼ら奇妙な者たちの性質とは、次のようなものである。

人々がそこからの離別を望むときでも、スンナを掴み離さない。たとえ人々に知られているものであっても、新しいもの（bid'ah）を忌避すること¹¹。

大多数の人々がそれを否定するときにも、唯一神崇拝を純化すること。

アッラーとその預言者の他に、師や教団、学派、または集団に帰属しないこと。

これら奇妙な者たちとは、アッラーただひとりに対する崇拝を以て、預言者に彼がもたらしたのものだけに従うことによって、帰属する者である。

またこれらの者たちは、文字通り〔素手で〕熾を掴むような者たちなのだ。

多くの人々——いや、すべての者たち——が彼らのことを非難するだろう。

ゆえに、この被造物のなかで、彼らは、称賛されるところの多数派から離れる異常な、異端な民とみなされるまでに、疎外されるのだ。

それは、使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が言われた、「彼らは、部族のなかで衝突する者です」という言明が意味する通りである。

真に、讃えあるアッラーは、地上の民が異なった宗教——焰と偶像の崇拝者たち²¹、象徴と十字架の崇拝者たち、キリスト教、ユダヤ教、サービア教、哲学者らにつき従ったとき、彼の使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）を遣わされた。その始まりに在ってイスラームは奇妙なものとして知られ、一度ある者がイスラームに帰依しアッラーとその預言者の呼びかけに応じたならば、彼はみずからの地域や部族の否定者とされ、また〔その者らは〕、部族や氏族から疎外されイスラーム

ムに帰依したばらばらの個々人であった。また彼らがイスラームに帰依してからも、イスラームが勝利し、その宣教が広まり、群衆が入信してくるまで、彼らはほんとうに少数派であった。そこで彼らから奇妙さが消失し、その後、始まったときのような奇妙なものに戻るまで、疎外と改変が行われるのである²²。

だが真のイスラーム——アッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）とその教友たちのところに在った頃の——が最初に現出したときより、今日〔のイスラームの状況〕は、遥かに奇妙なのである。たとえその象徴や儀礼が知られており、有名だとしても、今日において真のイスラームは、始まりのときより奇妙なものであり、その民は奇妙な者たちで、人々のあいだで疎外されているだろう²³。

だがしかし、大勢の官吏や官職に就いているような七十二²⁴の異端者たちにつき従う者たちがいて、そのなかで、極めて少数のひとつの集団が預言者のもたらしたものに反する仕方では存在しないということがありえようか？

もたらされたものそれ自体は、彼らの望むところのものとは対立している。彼らが在るところの状態は、正しそうに見えても間違えている（shubuhāt）のであり、彼らの徳や良い行いが消えてしまうような異端〔な状態〕なのである。またそれは彼らの目標とし望むところの対象でもある。

また、信仰者——アッラーの道に従う求道者——が、彼ら自分たちの欲望に従い、吝嗇な欲に従う、すべての自惚れた者たちのあいだで、奇妙なものでない、ということがあり得ようか？ それは使徒（彼にアッラーの祝福と平安あれ）が言われているように、

「善を命じ、悪を禁じなさい。あなたがたは、欲望に従い、それに執着し、現世を優先し、勝手なことを思って悦に浸っている者たちを見るでしょう。そしてあなたは、それに対して自分が何もできないということを見ることになります。そうなったのなら、あなたは自分ひとりだけでいなさい。彼ら大勢の人間に気をつけるのです。あなたは、耐え忍ぶ苦痛がまるで熾を手で掴んでいるような、〔痛苦に満ちた〕日々を目の前にしているのです²⁵」ということなのだ。

だが、この時世において真のムスリム——宗教を守る限り——には、教友五十人分の褒賞があるのである。

アブー・ダーウードとアル＝ティルミーゼーの『スナン』²⁶に収録された、アブー・サアラバ・アル＝フシャニーのハディースにはこうある²⁷。

「わたしが預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）に次の章句『信仰する者よ、汝らの責任は汝ら自身に課されている（5:105）』について訊いたとき、彼はこう言われた」。

「いえ、善を命じ、悪を禁じなさい。あなたがたは、欲望に従い、それに執着し、

現世を優先し、勝手なことを思って悦に浸っている者たちを見るでしょう。そしてあなたは、それに対して自分が何もできないということを見ることになります。そうしたならば、あなたは自分ひとりだけでいなさい。彼ら大勢の人間に気をつけるのです。あなたは、耐え忍ぶ苦痛がまるで熾を手で掴んでいるような、〔痛苦に満ちた〕日々を目の前にしているのです〕。

わたしは尋ねた。「預言者さま、彼らのうちで五十〔人分の〕の褒賞〔があるの〕ですか？」

預言者は答えた。「あなたがたのうちで五十〔人分の〕の褒賞〔があるの〕です」²⁸。

この偉大な褒賞は、人々のあいだにあって、欲望の闇のなかでもスナナを掴み離さない奇妙さゆえに〔与えられるので〕あるのである。

アッラーが〔人々に〕宗教における洞察、預言者のスナナの理解、聖典の理解を与えられ〔たのにもかかわらず〕、人々がそこ〔現実の世の中〕にあるもの——欲望や新しいもの、迷いなど——やアッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）とその教友がいた道から外れる、というのを見せられた信仰者たちが〔みずからは〕正しい道を歩むことを切実するのならば、その者は、彼ら不信仰者の先達たちが彼らのイマーム（彼にアッラーの祝福と平安あれ）とそれに従う者らにしたように、〔現在〕そこにある異端な民からの批判や、そのことによる彼らからの軽蔑、彼らをそこから追放しようとする、彼らに対して警戒するように仕向ける、という行いから〔彼自身が〕確固としてなければならない。

だがもしそれを呼びかけたなら、〔異端者たちは〕彼らがあるところの状態を批判し、〔怒りで〕立ち上がって放棄し、忠告した者に対して不幸を望み、罨を仕掛け、彼らの有力者に馬と人を送りつけるだろう。

つまり、人々の宗教が腐っているから、彼は宗教のために奇妙なのである。

人々が異端を掴んでいるから、彼はスナナに執着しているために奇妙なのである。

人々が腐った信条をもっているから、彼はその信条のために奇妙なのである。

人々が悪い礼拝を行っているから、彼はその礼拝のために奇妙なのである。

人々が腐敗した道にいるから、彼はその道のために奇妙なのである。

人々は帰属が異なっているから、彼はその帰属において奇妙なのである。

人々が望まない方法で交際するから、彼は人々との人付き合いにおいて奇妙なのである。

要するに、現世の事柄においても来世の事柄においても彼らは奇妙なのである。民衆のなかにある〔自分を〕助けたり、救うこと〔に価値を〕を見出さないのだから。彼は無知な人間のあいだで学識者であり、異端者たちのなかでスナナの友であり、異端を呼びかける者たちのなかでアッラーとその預言者を呼びかける者

であり、善が悪であって悪が善であるような民のもとで、善を呼びかけ悪を禁じる者なのである。

第二節：第二の奇妙さ

非難すべき奇妙さ——それは真理の民のあいだにいる虚偽の連中と墮落した連中たちの奇妙さである。彼らは、成功者であるアッラーの派閥にいるため〔外から見ると〕奇妙にみえる。彼らは仲間が多く派閥が多いにもかかわらず〔外からは〕奇妙な者たちと見なされる。彼らは仲間が多いために地上の民のもとではよく知られている孤独な者たちだが、天使たちのもとでは隠れている（まったく知られていない）。

第三節：褒められも責められもしないような中立的な第三の奇妙さ

祖国（waṭan、家）における奇妙さについて言えば、真にこの世において人々はみな奇妙な者たちなのだが、現世は永住の家ではない。また、そのために彼らが創られたのではない。

それは使徒（彼にアッラーの平安と祝福あれ）が、アブドゥッラー・ブン・ウマル（彼らにアッラーの嘉しあれ）に言われている、

「あなたはこの世で、奇妙で、もしくは旅人でありなさい」²⁹。

というように、それは、彼にそれを心で見よう、そして真の知識を以て知ろう命じられているのである。そして私には、この意味〔を解いた〕の詩がある。

永住の楽園に来たれ、なぜならば

それはあなたの最初の家、そこに野営があるのだから

しかし われわれは、敵の囚われの身 だからあなたは

われわれの家にもどり、平和になることを見ないか？

家から遠く離れて、われわれの奇妙さを超えるということがありえようか

そこには敵どもがいる、あなたがたはそれをどう見るか？

彼らは言う 奇妙なものが、もし故郷から離れ

散り散りになったとしたら、恵みがない

何がため 人間というのは一瞬たりとも恵みがない

人生において、苦痛のあと以外は

waḥaiya ‘alā jannāti ‘adninn fainnahā

manāziluka al-awlā wafihā al-mukhaiyamu

walākinnanā sabyu al-‘aduwi fahal tarā

na‘ūdu ilā awṭāninā wanusallimu?

*waaiyu ightirātin fawqa ghurbatinā allatī
 lahā aḍḥati al-a'adā'u finā taḥakkamu?
 waqaḍ za'amū anna al-gharība idhā n'aa
 washatṭat bihi awṭānuhu laysa yan'amū
 faman ajli dhā lā yan'amū al-'abdu sā'atan
 mina al-'umri illā ba'da mā yata'allamu*

この世において人間が^{アブド}奇妙^{ガリーフ}ではないということがあろうか。彼は旅路にある。墓場の人々のあいだでしか旅具を解かれることはないのか？ 彼は旅を終えてくつろいでいるのに。だから、こう言える。

この日々は旅程に過ぎない
 正しさ呼びかける者は、その日々には死を勧める
 もしよく考えるならば 最も満足すべきこと
 それは、(旅路が遂ぎ) 宿駅がしまわれ 旅人が休んでいる
*wamā hādhihi alayyāmu ilā marāḥilu
 yaḥutthu bihā dā'in ilā al-mauti qāṣidu
 wa-a'jabu shayin law ta'mmalta annahā
 manāzilu tuṭwā wal-musāfiru qā'idu*

第四節

^{マナーズィル}『旅路』の著者は述べている。

離郷 (ightirāb、疎外³⁰) とは、同類の者から離れていることによって、そのことが示されるということである。

すなわち、俗物たちのあいだで、高貴であることによって孤立している者そのすべてが彼らのあいだで^{ガリーフ}奇妙なのである。その高貴な性質が共通している者は皆無、あるいはごく僅かなのだから。

^{ハラウイー}彼は述べている。

それには三つの段階がある、と。

第一段階、祖国における奇妙さ

この^{ガリーフ}奇妙な者の死は殉教である。〔死んだら〕彼のために、埋葬された墓所から祖国に向けて〔距離が〕測られる。そして最後の審判の日には、マルヤムの子イーサー（彼に平安あれ）のもとに集められる。

奇妙さというものとは孤立することである。孤立とは物理的なものであり、またその意図や状態において、あるいはその双方において孤立しているのである。奇妙な者は〔祖国から〕物理的・身体的に離れているか、あるいは心や意図、状態として離れている。もしくはその双方が離れているのである。

彼は述べた。「この奇妙な者の死は殉教である」、と。

アブー・フライラ（彼にアッラーの嘉しあれ）が、イブン・スィーリーンに伝え、それがヒシャーム・ブン・ヒサーンに伝わり、ユルワーが伝えたハディースによると、使徒（彼にアッラーの平安と祝福あれ）は言われた。

「奇妙な者の死は殉教である」³¹。

しかしながら、このハディースは実証されていない。そのなかの何者もが確実ではないような伝承経路から伝えられている。

イマーム・アハマド〔ブン・ハンバル〕は述べている。

「このハディースは否定すべきものである」。

他方、「埋葬された墓所から祖国に向けて測られる」、ということについては以下のように言うことができる。

すなわち、アブドゥッラー・ブン・ワハブが伝えた次のハディース——アブドゥッラー・ブン・アムルが、アブー・アブドゥッラフマーン・アル＝バジャリーに伝え³²、ハイイ・ブン・アブドゥッラーが伝えたハディースにはこうある。

ある街で——その街生まれの——ある者が死去した。アッラーの預言者（彼にアッラーの平安と祝福あれ）は〔葬儀の〕礼拝を行い、そして言われた。

「彼の死地が生まれた場所でなかったらよかったです」。

ある者が尋ねた。「何故でしょうか、アッラーの預言者さま」。

預言者は答えた。「人が死んだら、生まれた場所から足跡が途絶えるところまでが、天国から測られるからです³³」。

ハイイがイブン・ラヒアにこの伝承経路で伝えたところではこうある。

アッラーの預言者（彼にアッラーの平安と祝福あれ）はマディーナで墓所にいたある男にこう言われた。

「〔墓で眠る〕彼が余所で亡くなったらどうだったのでしょうかね」。

ある者が尋ねた。「奇妙な者たちが彼らの祖国以外で死んだらどうなるのですか？」

預言者は答えた。「奇妙な者が彼の祖国以外で死んだ場合、天国で彼の家から彼の墓地までが測られるのです」³⁴。

そして言われた。「そして最後の審判の日にマルヤムの子イーサーのもとに集められるのです」。

これはイマーム・アハマドが伝えているハディースを示している。アル＝カー

スイム・ブン・ジャミールのハディース、ムハンマド・ブン・ムスリムのハディース、アブドゥッラー・ブン・アムルがサルマーン・ブン・ホルムズに伝え、それがアブドゥッラー・ブン・イドリースに伝わり、ウスマーン・ブン・アブドゥッラー・ブン・イドリースが伝えたハディースによると、預言者（彼にアッラーの平安と祝福あれ）は言われた。

「アッラーに最も愛されるのは奇妙な者たちです」。

ある者が尋ねた。「ではその奇妙な者たちとは何なのでしょうか」。

預言者は答えた。「宗教を以て逃れ、最後の審判の日にマルヤムの子イーサーのもとに集まる者たちのことです」³⁵。

第二段階、状態における奇妙さ

これは、「幸せあれ」と言われているところの奇妙な者たちである。彼は過ちの時代の誤った人々のあいだにおける正しい者、あるいは無明時代における学ある者、もしくは偽信仰の時代における敬虔な者である。

ここでいう「状態 (hāl³⁶)」という言葉の宗教における属性は何かというと、スナナを掴むことであって、〔神秘主義の〕専門用語としての〈行う〉に対する〈状態〉という意義ではなく、それによって意図されているところの真理を知る者、行う者、呼びかける者のことである。

師は奇妙な者たちというものを、さらに三つの類型に分類している。

過誤の時代において、正しさと宗教を持っている者。

無知な民のあいだで、知識と真知を持っている者。

偽りと偽信仰の民のあいだで、誠実さと純粋な信仰を持っている者。

これらの状態というのは、彼らの周りにいる人々の属性とは異なる。それらの人々との関係を例えると、鳥の群れのなかの一只の奇妙な鳥、犬の群れのなかの一匹の奇妙な犬、とでも言えよう。

正しい者とは、その者の言葉と行動において正しい者、心と言葉において正しい者なのであり、その力のすべてがアッラーとその預言者への服従に引き寄せられ、偽信者——その表面と内面、言葉と行動が違う者たち——とは真逆なのである。

第三段階、志における奇妙さ

これは真理の探究における奇妙さなのであり、それは真知の奇妙さである。

彼が見るものにおいて^{ガリーブ}奇妙であり、彼が見るところ＝視座において共にあるものは^{ガリーブ}奇妙であり、彼に見られるものは知では担うことはできず、あるいは感覚はそれを表すことができない、あるいは形はそれと共に為されない、あるいはそれを示すことはできない、あるいは^{ガリーブ}奇妙という名称はそれを含まない。だからその真智の奇妙さとは、奇妙さの中の奇妙さなのだ。それは現世においても来世においても奇妙なのである。

ただ、この段階というのは、その前段階より上の段階にある。

第一段階の奇妙さは、物理的な奇妙さである。

第二段階は、言葉と状態の^{グ ル バ}奇妙さである。

そしてこの第三段階は、志の^{ヒシマ グ ル バ}奇妙さなのである。真知者の志というものは、〈知られるもの〉の周りを飛び交っている。だからそれは現世を求める者たちについては言うまでもなく、来世を求める者たちのあいだでも^{ガリーブ}奇妙なのだ。現世を求める者のなかで来世を求める者が^{ガリーブ}奇妙であるように。

^{ハラウイー}彼は述べている。「見るところ（shahid、視座）において真知者は奇妙な者である」と。真知者における認識の^{シヤーヒド}視座。それは彼の〔真知の〕もとで見えるもの（yush'had）なのであり、正しさとともに、見られるものが見たとおりにあり、知られたものが知ったとおりに認識されるということなのだ。

この認識の視座は彼の心のなかにあり、それはアッラーへの近しさと親しさ、また^{アッラー}彼への拝謁あるいは憧憬への強さと^{ス イ フ}喜びなのである。ゆえにこれが心の^{カルブ}奥底と心における認識の視座なのである。

真実を信じる心における認識の視座は、この二つの認識の視座に対して、心では虚偽に対して真実であるとは決して証言しない。

つまり、もしあなたの事柄や状態が隠されたとしたら（わからなかったら）、〔認識が〕正しい者たちの心に尋ねてみよ。彼はあなたの状態を伝えるのだから。

^{ハラウイー}彼は述べた。「彼の認識の視座において、それに付随するものは^{ガ リ ー プ}奇妙なものである」。認識の視座において付随するものは、彼に付随するところの^{イルム アマル}知と行為と^{ハール}状態である。

またそれは、このことの果実を味わったことがない者にとっては^{ガリーブ}奇妙であろう。それは谷底にあり、また、その者も谷底にいるのだから。

^{ハラウイー}彼は述べている。「彼に〈^{マ ウ シ ュ ヲ ド}見られるもの〉は知が担うことはできない…来世には」と。彼の見ることに於いて、彼が見つめる〈見られるもの〉とは、上述した三つの段階で実存的に、主体的に、真実において見出すものなのである。

知が担うものとは、それが崩れてしまうと信仰も崩れてしまうような、知識の諸判断なのだ。

〈見る^{シヤ}こと^{ヒド}〉における〈見^マられ^ラる^ルもの^{モド}〉——アッラーとその預言者が、その法と命令によって〔人間にそれを行うことを〕望んだところの「正しさ」に突き当たった状態は、しかし多くの者のなかで疎かにされている。彼らのもとでは、彼らが盲従する者たちが許可と言ったもの以外には合法^{ハラール}はなく、彼ら禁じたもの以外には禁止^{ハラーム}はなく、また宗教は彼がくださったもの以外にはないのである。そして、それがテキストよりも優先され、預言者や教友、その他すべての知の民の言葉が無視されているのだ³⁷。

彼は述べている。「あるいは、体感^{ワジド}はそれを明らかにしない^{マウジュード}」、と。

知がそれを追認した場合、それは正しい体感である。しかし、知による裏付けがなければ、それは真理から逸脱している。

それが意味するのは、アッラーと彼の名、その属性、彼の裁定を知る者の〈現^ワす^シもの^ド〉は、それ以外の者にとっては、志、真知、探究心に応じて奇妙^{カリーブ}であるのだ。

彼は述べている。「それによって存立^{マウジュード}するところの外形^{ラスム}」、と。

外形^{ラスム}とは、創造された形象であり、その属性と行為なのである。

だが、他の意味である可能性もある。彼の外形^{ラスム}というのは、それを行う^{キヤム}ことはできる。しかし、その上位には、人間が外形^{ラスム}を行うこともできなければ、示すことも、現^イす^スこともできない。そしてこれは彼の解釈の二つの意味のうちより有力なものである。それは彼が後述している、「あるいは、示すことはできない」という文脈が示しているからだ。

つまり、〈見^アられ^ラれたもの^{モド}〉というのは、他の人に理解させること、それを示すことはできないのである。

だから彼は述べているのだ。「もしくは、外形^{ラスム}は含むことができない」、と。

それは、表現というものがそれに当て嵌まることができない、という意味である。

だから、師^{ハラウィー}は次の五つの段階を述べているのである。

- 一、知がそれを担う段階
- 二、体感がそれを示す段階
- 三、その描写が明らかにする段階
- 四、指示ができる段階
- 五、言示を包括する段階

彼の意図するところでは、真知者によって〈見^アられ^ラれたもの^{モド}〉は、他の人間が見たものに比べ隠れており、より細かい。だから彼以外の〈見る^{シヤ}こと^{ヒド}〉と比べて奇

妙なのである。

そして彼はこれらのすべての段階において、彼らが見たものは奇妙であると述べており、これらの見られているものが奇妙なのである。見ているものですら奇妙であるのだから、それができないもの、というのが如何に奇妙なものであろうか？

それが最も激しい奇妙さなのである。

彼は述べた。「ゆえに、真知者の奇妙さとは、奇妙さ中の奇妙さなのである (fa-ghurbatuhun ghurbatu al-ghurbati)」。

奇妙さは、同種の者たちのあいだで、彼らのなかで同じ出自であるにもかかわらず奇妙なもの^フのことである。

〈知られたもの〉の奇妙さ^{グ ル バ}に関しては、同種のひとたちとのあいだに僅かな関係性しかない。というのは、ある任務=仕事にあって、他の人々は異なる任務=仕事に従事しているからだ。それが奇妙さにおける奇妙さ中の奇妙さである。

だが同様に、人々のなかで奇妙な者^グたちは正しい者たちなのである。また、正しい者たちのなかで奇妙な者^ラたちは苦行者たちなのである。そして、苦行者たちのなかで奇妙な者^バたちは真知者たちなのである。

彼は述べた。「現世でも奇妙であって、来世でも奇妙である」。

この意味は、現世のひとたちは、その者のことを知らず、また来世の人々——^ア慎み深い人間——はその者のことを知らない。なぜなら、その者の位階は人々の位階より上にあり、来世の人々の志は崇拜に繋がれているが、その者の志は崇拜のとともに信仰に繋がれているからだ。ゆえに彼は人々を見るが、人々は彼を見ることがない。次に言われているように。

わたしは隠れている その翼の影のもとにある運命から
 わたしの目はわたしの運命を見る でも私の運命はわたしを見ない
 もし、あなたがその日々にわたしの名を尋ねたのなら 彼らは知らない
 わたしの場所を わたしの場所を彼らは知らない
tasattartu min dahri bizilli janāhihi
fa'aynī tarā dahri walaysa yarānī
falau tas'alu al-ayyāma mā āsmī lamā darat
waayna makānī mā 'arafna makānī

補遺——アンサーリー・ハラウイー『旅路を行く者』「グルバ章」³⁸

祝福に満ちた威光高きアッラーは言われた。「それで汝より前の世代には、地

上の荒廃を禁ずる卓越性の持ち主はいなかったのか、彼らのうちわれらが救い出した少数の者の他には」。

離郷（イグティラブ）とは、同類の者から離れていることによって、そのことが示されるということである。

それには三つの段階がある。

第一段階、祖国における奇妙さ

この奇妙な者の死は殉教である。（死んだら）彼のために、埋葬された墓所から祖国に向けて〔距離が〕測られる。そして最後の審判の日には、マルヤムの子イサー（彼に平安あれ）のもとに集められる。

第二段階、状態における奇妙さ

これは、「幸せあれ」と言われているところの奇妙な者たちである。彼は過誤の時代の過った人々のあいだにおける正しい者、あるいは無明時代における学ある者、もしくは偽信者の時代における敬虔な者である。

第三段階、志における奇妙さ

それは真理の探究における奇妙さなのであり、それは真知の奇妙さである。彼が見るものにおいて奇妙であり、彼が見るところにおいて共にあるものは奇妙であり、彼に見られるものは知が運ぶことはできず、あるいは感覚はそれを表すことができない、あるいは形はそれと共にはなさない、あるいはそれを示すことはできない、あるいは奇妙という名前はそれを含まない。だからその真知の奇妙さとは、奇妙さの中の奇妙さなのだ。それは現世においても来世においても奇妙なのである。

第二部：解題

翻訳の底本とした『奇妙なもの奇妙な者たち』には、本稿で訳出したイブン・カイイムのテキストの他に、彼の師であるイブン・タイミーヤ³⁹の書翰と11世紀にウマイヤ朝治下のアンダルスで活躍したマーリク学派の法学者アブー・イサーク・アル＝シャーティビー（Abū Ishāq Ibrāhīm b. Mūsā b. Muḥammad al-Lakhamī al-Shāṭibī, d. 790/1388）のテキストが収録されている⁴⁰。筆者は、イブン・タイミーヤの拙訳⁴¹において、「奇妙な者たちに幸せあれ」というハディースの一節が現代ジハード主義者の聖戦の正当性を担保する機能を果たしているのではないかという仮説を提出し、その論拠をイブン・タイミーヤ書翰から解き明かそうと試みた。

イブン・タイミーヤの書翰は、彼の言う本当のイスラームが疎外され、真の信仰者が〈奇妙な者たち＝少数派〉と見做される状況を「グルバ」と「グラバー」

というタームを軸に叙述し、「イスラームは奇妙なものとして始まった〔…〕奇妙な者たちに幸せあれ」というハディースを、イスラームの勝利という来たるべき終末に位置づけ、その到来に向けたジハードを呼びかけている。

一方で、本稿で訳出したイブン・カイイム著述では、「奇妙な者たち」に関連するハディースを異伝も含め網羅的に引き、タイミーヤ書翰とは異なる角度から「奇妙な者たち」の姿を素描している。ジハードという命題に向かうタイミーヤの直線的な理路とは異なり、カイイムは〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉の概念それ自体を掘り下げていく垂直的な論旨を展開している。タイミーヤの論考では曖昧なものに留まっていた〈奇妙なもの〉という概念と〈奇妙な者たち〉の姿を高解像度で捉えるうえで本稿は重要な役割を果たすため、ここに訳出した。

以下、訳者解題として、本稿の解説、イブン・タイミーヤとの比較、の二点を論じてみたい。しかし、予め断っておくと、アラビア語文学・詩篇や神秘主義は疎か、イブン・カイイムの神学的立場について論じることは筆者の能力を越えている。イブン・カイイムの本稿は、ハンバル学派のスーフィーであるアンサーリー・ハラウィーの『旅路を行く者』を註釈する形で書かれ、第四節に代表されるのようにカイイム自身が神秘主義や詩への造詣が深かったことから、本稿の後半部分はスーフィズムの議論に傾倒していく。その神秘主義の思想史的位置づけやイブン・カイイムの神学観についての議論は筆者の手に余るので、本解題は現代的なジハード主義運動の観点から重要と思われる論点の整理とイブン・タイミーヤの手による同主題を論じた書翰との比較に限定したい。その前にまずは、著者イブン・カイイムについて見ておこう。

1. イブン・カイイム・ジャウズィーヤーイスラーム神秘主義者の肖像

中世シリアを生きたハンバル学派のイスラーム学者イブン・カイイムは、諱をシャムスッディーン・アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アビー・バクル・イブン・アイユブ・アル＝ザルイー・アル＝ディマシュキー (Shams al-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Abī Bakr b. Ayyūb al-Zur'ī al-Dimashqī) という。彼の通称であるイブン・カイイム・アル＝ジャウズィーヤとは、「ジャウズィーヤ学院の管理人の息子」といった意味で、彼の父親アブー・バクル・イブン・サアド・アル＝ザルイーがダマスカスにあるハンバル学派の学堂「ジャウズィーヤ学院」の管理者だったことに由来する。だが、彼の学問の師はその父ではなく、タキーユッディーン・イブン・タイミーヤである⁴²。イブン・カイイムは21歳の時にイブン・タイミーヤと出会い、以後師がこの世を去るまで弟子として彼に学んだ⁴³。

イブン・タイミーヤは、権力側の論敵を激しく論難したことで投獄されるに至

るが、イブン・カイイムもその論争に参戦し一緒に投獄されている。タイミーヤとカイイムに関する研究業績を残している伝統派神学の研究者リヅナット・ホルツマンによると、こうした論争においてイブン・カイイムはイブン・タイミーヤの神学観に依拠しているという。「イブン・タイミーヤの神学観、すなわちクルアーンとハディースの字句、ならびに学者たちの合意事項 (ijmā') と教友 (salaf) たちの教訓、それらを思弁神学の教義のもとに統合する多大な努力に対し、完全かつ敬虔な遵守を要求すること⁴⁴」がそれである。当時、彼らが生きたマムルーク朝時代のダマスカスやカイロでは、アシュアリー派神学が権力者たちのあいだで広く共有されていたが、イブン・タイミーヤやイブン・カイイムの上述のような神学的立場は、まさしく「ハディースの徒」と呼ぶに相応しい厳格に聖典に準拠する姿勢であった⁴⁵。

イブン・カイイムはイスラーム諸学のあらゆる分野で業績を残しており、彼独自の思想を構築することに成功しているが、その筆跡のなかには、イブン・タイミーヤが与えた論理や知見、ファトワーや書翰^{リサーラ}での主張を見出すことができる⁴⁶。

『求道者の階梯』—正確な書名は『我々はあなたのみを崇拜し、あなたのみを救いを求める』宿駅のあいだの求道者の階梯 (*Madārij al-Sālikin bayna Manāzil Iyyāka Na'budu wa Iyyāka Nasta'in*)⁴⁷—は、イブン・カイイムの神秘主義思想の集大成と目される主著のひとつで⁴⁸、ハンバル学派の神秘主義思想家アブー・イスマーイル・アブドゥッラー・アル＝ハラウィー・アンサーリー (Abū Ismā'il 'Abd Allāh al-Harawī Anṣārī) の『旅路を行く者』を註釈した大著である (ただし、本書にはハラウィーへの批判も多く含まれている)。『求道者の階梯』は現代のアラビア語圏で広く親まれている古典に数えられるが、その影響力にもかかわらず西洋圏では本格的な研究対象として顧みられてこなかった⁴⁹。だが、これまで『求道者の階梯』を英語圏で精力的に紹介してきたオヴァミル・アンジュムによる学術翻訳の刊行が近く予定されており、今後非アラビア圏でもその受容が進むものと考えられる⁵⁰。

イブン・カイイムと『求道者の階梯』についての詳細は、アンジュムの研究に委ねるが、ここで彼の人物像を簡潔に振り返っておきたい。イブン・カイイムの弟子イブン・ラジャブ・アル＝ハンバリー (Zain al-Dīn Abū al-Faraj 'Abd al-Raḥmān b. Aḥmad b. Rajab al-Baghdādī al-Hanbalī, d. 795/1392-1393)⁵¹ は、師について「神学と文法学を学び、神秘学、神秘主義者の術語、修辞学、繊細さを究めた註釈学者にしてアラビア語文法学者、イスラーム学者⁵²」と評している。イブン・カイイムに直接学んだイブン・ラジャブは、彼の最良の理解者のひとりであり、紹介者として最適任者であろう⁵³。その彼は次のように述べている。

イブン・カイイムは、卓越した信仰心、夜警、例外的に長い礼拝、深く、不変な記憶力、悔悟、謙虚かつ徹底したアッラーへの服従、そしてクルアーンとスンナ、信仰の实在において、いままで私が目にしたことのないような、それ以上の学知を見たことがないような方であった。当然、彼は無謬の存在ではないが、私は彼のような〔確かな〕人を見たことがない。彼は幾度となく迫害に直面し、毅然と耐え抜いた。彼は、師イブン・タイミーヤが最期を迎えた城塞に共に囚われた。彼らは収監されているあいだ別々の房におり、イブン・カイイムはイブン・タイミーヤの他界した後に放免された。牢の中でイブン・カイイムは、常にクルアーンを復唱し、反芻していたという。そして、それが彼に深遠な霊的洞察と発見をもたらした。この経験によって、彼は神秘主義的言説を獲得し、その深みへと踏み出した。そしてそれが彼の書物に吹き込まれたのである⁵⁴。

1326年(726 A.H.) 師イブン・タイミーヤと時期を同じくして投獄され、そして獄中で最期を迎えた師を看取ることができずに塙の外へと出されたイブン・カイイム。獄中で聖典に徹底的に向き合い、霊的洞察を得た後に書かれた『求道者の階梯』には、師イブン・タイミーヤに対する畏敬の念と敬愛がほかのどの著述よりも反映されているという⁵⁵。イブン・カイイムはタイミーヤの死後も二度投獄されているが、その理由は師タイミーヤが下したヘブロン(al-Khalil)を巡礼の地としては認めないというハディースを擁護したためだった⁵⁶。

2. 本論考の解説

ハディース「イスラームは奇妙なものとして始まった〔…〕奇妙な者たちに幸せあれ」で言及されている〈奇妙な者たち〉とはどのような者なのだろうか。イブン・カイイムはその輪郭を明瞭に浮かび上がらせることに成功している。

曰く、〈奇妙な者たち〉とは、「人々が腐敗したときにそれを正す者たち」であり、「人々が欠けたときに増やす者たち」であり、「部族のなかで衝突する者」である。それは、「多数の人々のなかの少数の善い者たち」であり、「宗教を以て逃れ、最後の審判の日にマルヤムの子イーサー（彼に平安あれ）のもとに集まっていく者たち」であり、預言者の「スンナを蘇らせる者」である。彼らは「弱々しく」「髪はみだれ、埃にまみれ、襤褸をまとい、誰も見向きもしない」ような変わり者だが、一度「アッラーに対して誓えば、それを成就させることができる」者たちでもある。そのような周囲から奇妙な集団と見做される彼らだが、カイイムに言わせると、彼らこそが本当の信仰者である。そして、その傍証として「アッ

ラーは罪がなく、敬虔で、親切で、隠れた者を愛される」というハディースが引用される。この〈奇妙な者たち〉は非常にすくないことから「グラバー（奇妙な者たち、少数派）」と呼ばれる。

こうした描写から想像される〈奇妙な者たち〉の姿は、弱々しく小汚い風貌の、周囲に阿ることなく、部族内での衝突も厭わずに不正を正す正義漢であり、それゆえに周囲の人間たちからは疎まれる存在であるかに思われる。このような奇妙な、おそらく実社会では大多数の人々から「狂信者」と切り捨てられかねないが、信仰に実直な者たちを〈奇妙な者たち〉として救い出してみせるこのハディースは、信仰の道において弾圧に曝される者たちの支えとなる。

イブン・カイイムは、〈奇妙な者たち〉は非常にすくないことから「グラバー」と呼ばれ、それゆえ多くの人々はこの性質をもたないと論じる。後に見ていくがイブン・カイイムがこの「奇妙さ」を性質と捉えている点に留意されたい。この「奇妙さ」には類型と段階があり、また〈奇妙な者たち〉は次のように階層化されている。すなわち、人々におけるムスリム、ムスリムにおける信仰者、信仰者における知を持つ者、知を持つ者におけるスンナの民、そのなかでもスンナを呼びかけそれに反する害悪に耐える者が「奇妙さ」において最も激しい者であるとされる。

ここですこし用語について補足しておきたい。本稿の主題である〈奇妙なもの〉そして〈奇妙な者たち〉というアラビア語の単語は、「G-R-B」という共通の語根から派生した語彙である。グルバ (ghurbah) には奇妙、疎外、離別、孤独、鬱屈といった意味があり、その行為者名詞であるグラバー (ghurabā') には奇妙な者たち、余所者、異邦人、疎外された者といった含意がある。

つまりここで言われている「奇妙さ」とは、外見や言動などが「風変わりな」という意味の「奇妙さ」ではなく（もっともハディースで言及されている〈奇妙な者たち〉は外見の面でも奇妙なのだが）、周囲の人々から「疎外された」「離れた」という意味での「奇妙さ」なのである。したがって、彼らの「奇妙さ」は一般的な人々との対比で表象される。

つまり、人々の宗教が腐っているから、彼は宗教のために奇妙なのである。
 人々が異端を掴んでいるから、彼はスンナに執着しているために奇妙なのである。
 人々が腐った信条を持っているから、彼はその信条のために奇妙なのである。
 人々が悪い礼拝を行っているから、彼はその礼拝のために奇妙なのである。
 人々が腐敗した道に入るから、彼はその道のために奇妙なのである。
 人々は帰属が異なっているから、彼はその帰属において奇妙なのである。
 人々が望まない方法で交際するから、彼は人々との人付き合いにおいて奇妙

なのである。

要するに、イブン・カイイムに言わせると、〈奇妙な者たち〉が奇妙に見えるのは、端的に言って大多数が信仰の道において誤っているからなのである。この〈奇妙な者たち〉は、始まりのときにそうであったように、イスラームが広まり共同体が大きくなっても少数の集団に留まる。

また彼らがイスラームに帰依してからも、イスラームが勝利し、その宣教が広まり、群衆が入信してくるまで、彼らはほんとうに少数派であった。そこで彼らから奇妙さが消失し、その後、始まったときのような奇妙なものに戻るまで、疎外と改変が行われるのである。

ここで言われている「彼ら」とは人々一般を指している。イスラームは始まりにあって小さな信徒の共同体であったが、やがてその教えが広まり大勢の群衆が入信してきたために、彼らのグルバが失われた。そして、共同体のサイズが大きくなり、無知無学な者も増えた結果、無知に基づく教義の曲解や改変が行われるだろうとカイイムは予言する。

だが真のイスラーム——アッラーの預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）とその教友たちのところに在った頃の——が最初に現出したときより、今日は、遥かに奇妙なのである。たとえその象徴や儀礼が知られており、有名だとしても、今日において真のイスラームは、始まりのときより奇妙なものであり、その民は奇妙な者たちで、人々のあいだで疎外されているだろう。

このように、14世紀中葉のシリアを生きたイブン・カイイムは、当時の社会におけるイスラームの状況を、イスラームの最初期より文字通り奇妙おかしなものであるとの診断を下している。この認識を21世紀となった現代に当て嵌めてみると、現在、イスラームは世界大で拡がりを見せ、象徴や儀礼（たとえばキブラなどの象徴や礼拝などの儀礼）が非ムスリムにも知られている一方で、カイイムが本稿で論じている真のイスラーム——〈奇妙な者たち〉のイスラーム——は、始まりのときよりも奇妙なものとして疎外されていると言える。

この世界観はいわゆるサラフ・ジハード主義者が憂う現代社会の状況と重なる。他方で、彼らはずからを〈奇妙な者〉と割り切ってしまうことで、この状況を耐えしのぐこともできるが、イブン・タイミーヤのように、こうしたイスラームの状況を打開するための聖戦の呼びかけに接続することも可能である。

しかし、イブン・カイイムは「善を命じ、悪を禁じなさい。あなたがたは、欲望に従い、それに執着し、現世を優先し、勝手なことを思って悦に浸っている者たちを見るでしょう。そしてあなたは、それに対して自分が何もできないということを見ることになります。そうなったのならば、あなたは自分ひとりだけでいなさい。彼ら大勢の人間に気をつけるのです。あなたは、耐え忍ぶ苦痛がまるで熾を手で掴んでいるような、〔痛苦に満ちた〕日々を目の前にしているのです」というハディースを引き忍耐を説く。この解釈においては、イブン・タイミーヤとの違いは明白である。

3. イブン・タイミーヤ書翰との比較

イブン・タイミーヤとその弟子であったイブン・カイイムは、同時代を生きた学者であり、当時のイスラーム世界の社会的状況に対して同様の診断を下しているが、別様の処方箋を提示している。

後期ハンバル派の思想を論じた著書のなかでジョセフ・ベルは、イブン・カイイムとイブン・タイミーヤのあいだに神学上の相違はなく、教義についてもカイイムは師に多くを負っているが、文体や主題は異なると述べている⁵⁷。この二人に学んだイブン・カスィール (Abū al-Fidā' Imād al-Dīn Ismā'īl b. 'Umar b. Kathīr al-Qurashī al-Damashqī, d. 774/1373)⁵⁸ は、イブン・カイイムは情に深く礼儀正しい性格で筆致も美しかったと述べており、激しやすく判読が困難な筆跡で知られるタイミーヤとは人柄の面で真逆であるかに見える⁵⁹。無論のこと、同じ主題を扱った本稿においても、この二人のあいだにはいくつかの類似点は認められるものの、多くの相違点が見受けられる。以下、その差異を挙げてみたい。

まずはスタイルの面で、クルアーンを引きながら明確に「ジハード」というテーマを推し進めるように筆を運ぶタイミーヤに対して、カイイムは異伝も含めたハディースを網羅的に引きハラウィーを援用し詩を吟じながら神秘主義的な議論の深淵へと傾倒していく慎重な手つきで筆を進めている。文体の面では、両者ともに筆致は雄弁であり、修辭的な意匠が散りばめられているが、イブン・カイイムは細部にまで行き届いた繊細さが特徴といえる⁶⁰。

イブン・タイミーヤはイスラーム世界の信仰と実践における弱体化と為政者や学者のミスリードを正すための聖戦を説くが、イブン・カイイムはグルバに複数の類型や段階があることを指摘し、精神世界においてそのグルバを深化していく修身・克己の重要性を説く。

本稿において、イブン・カイイムの特筆すべき点は、〈奇妙な者たち〉の奇妙さについて思考を巡らしているところだろう。イブン・カイイムはアンサーリー・ハラウィーの議論を援用して〈奇妙な者たち〉が持つ奇妙さの他に、「非難すべ

き奇妙さ」と「褒められも責められもしないような中立的な奇妙さ」があり、前者は偽りの、墮落した者たちの奇妙さであると論じる。彼ら彼女らはムスリムであるため、非ムスリムの側から見ると奇妙な者たち（即ち、ムスリム）と見做され、地上ではよく知られているが、天ではまったく知られていない存在である。後者は、ただ単に祖国から離れたところにいる、物理的な意味で疎外された者たちである。本稿で引用されるハディースに、ムスリムは死後に出生地から死地までの距離が天国から測られるという伝承があり、基本的に遠くで亡くなった方がいいとされる。その意味で、祖国から離れた遠くにいる者たちも「グラバー」であるが、これは特に善悪とは関係のない中立的なグルバである評価とされる。

イブン・カイイムはこの三つの「奇妙さ」とは別に、アンサーリー・ハラウィーに依拠して「奇妙さ」の三つの段階について述べている。その第一段階が「祖国における奇妙さ」であり、上記の第三の「中立的なグルバ」はこれに該当する。それは物理的に離郷しているか、もしくは「状態」が離れているか、その双方かであるとされる。そしてこの『状態』における奇妙さが第二段階の奇妙さとなる。この状態とはスーフイズムの専門用語の「状態」の意味ではなく、スンナを遵守することと定義され、「周囲にいる人々一般の属性と異なる」という意味で「状態における奇妙さ」、あるいは状態が（一般の人々と）離れていることを指す。そして第三段階の奇妙さは「志における奇妙さ」で、それは真知者の奇妙さであるとされるが、この「真知」について論じることは本稿の主題から逸れるためここでは措く。

以上のように、イブン・カイイムは、「グルバ」というものの性質に焦点を当て、その諸相を考察している点で、イブン・タイミーヤの論考とは大きく異なる。

後半の神秘主義的な議論や詩の評価は措くとしても、〈奇妙な者たち〉のハディースを列挙し、その人物像を正確に描写しているところに、本稿の価値がある。イスラーム諸学はクルアーンやハディースに立脚しさまざまな規範や法規を明らかにしてきた。しかし、法源で明文化されていない問題についての解釈は分かれ、現在でも多くの論争が存在する。「イスラームは奇妙なものとして始まった。そしてそれは始まりのような奇妙なものに戻るだろう。奇妙な者たちに幸せあれ——」。この少数派＝奇妙な者たちの来たるべき神の祝福を予言したこのハディースについても、聖戦を説くイブン・タイミーヤと修身を説くイブン・カイイムの解釈はまるで異なる。転じて、現代社会に目を向けてみると、サラフ・ジハード主義者と呼ばれる者たちのなかには、彼らの聖戦に身を投じる者もいるが、それはおそらくはごく僅かな者たちの、一側面に過ぎないのである。

略号一覧

注でハディースの典拠を示す場合は、下記の略号を用いることにする。なお、著者、著作に続く番号は「ハディース番号」であり頁数ではない。たとえば、Aḥmad, MAY, 3785 (q.v.)とある場合、アハマド著『ムスナド』収録の3785番目のハディースを指す。

- JS ... *Al-Jāmi' al-Ṣaḥīḥ* (ティルミズィー集成)
- MAH ... *Musnad Aḥmad ibn Ḥanbal* (ブン・ハンバル集成)
- MAY ... *Musnad Abū Ya'lā* (アブー・ヤァラー集成)
- SAD ... *Sunan Abū Dāwūd* (アブー・ダーウード集成)
- SB ... *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī* (ブハーリー集成)
- SIH ... *Ṣaḥīḥ ibn Ḥibbān* (ヒッバーン集成)
- SIM ... *Sunan ibn Mājah* (イブン・マージャ集成)
- SM ... *Ṣaḥīḥ Muslim* (ムスリム集成)

また、本稿は二つの異なる版を翻訳の底本としているため、原註を訳出した際には、その典拠を下記の略号で表し、続けて頁数を記す。

- GG ... *al-Ghurba wal-Ghurabā'* (Hilālī 編)
- MS ... *Madārij al-Sālikin* (Arnawūṭ 編)

注

第一部 イブン・カイイム『求道者の階梯』グルバ章

- 1 中田考「イスラーム『復興』運動の理念—イブン・タイミーヤのハディース注釈を手がかりに—『イスラームは少数派として始まった』ハディース注釈の解説をかねて」『日本サウディアラビア協会報』CXXXVII (1988) : 4-11; 石郷岡宏記「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉——イブン・タイミーヤ『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース註解論考の翻訳と解題」『同志社グローバル・スタディーズ』VIII (2018) : 177-204.
- 2 これ（イスラームの師）は、イブン・カイイム・アル=ジャウズイーヤが『求道者の階梯』で註釈している底本『旅路を行く者』「グルバ章」の著者アブー・イスマーイール・アル=ハラウィーのことで、イブン・タイミーヤのことを指すのではない。[GG, 6I]
- 3 奇妙な者たち (ghurabāʾ, 少数派) という語の意味については、拙稿 [前掲論文 : 196頁] を参照されたい。
- 4 Abū Yaʿlā, *MAY*, 498 (q.v.). [GG, 62]; Ājuri, *Ṣifāh al-Ghurabāʾ*, 1 (q.v.). [MS, 89I]
アブー・ヤアラー (Abū Yaʿlā Muḥammad ibn al-Ḥusayn Ibn al-Farrāʾ, d. 458/1066) は、11世紀にバグダードで活躍したハンバル学派の学者で、特に法学の分野で著名な成果を残している。アル=アージュッリー (Muḥammad b. al-Ḥusayn b. ʿAbdallāh Abū Bakr al-Ājurri, d. 320/970) は、イラク首都バグダード西部のアージュッル出身の学者で、主著に『シャリーアの書 (*Kitāb al-Sharīʿah*)』がある。本書で引用されているのは、同著者の『奇妙な者たちの書 (*Kitāb al-Ghurabāʾ*)』であり、「奇妙な者たち」について論じた古典である。アージュッリーの『奇妙な者たちの書』の内容については別の機会に譲りたい。
- 5 イブン・カイイムのようなハンバル学派の学者が断りなく「イマーム・アハマド」や「アハマド」と引く場合、ハンバル法学派の学祖アハマド・ブン・ハンバル (Abū ʿAbdullāh Aḥmad b. Muḥammad b. Ḥanbal al-Shaybānī, d. 241/855) のことを指す。ブン・ハンバルは、法学 (fiqh) の分野のみならず、ハディース学者としても著名で、注16に示したスンナ派六大ハディース集成には数えられないが、彼のハディース集成『ムスナド・アハマド・イブン・ハンバル』 (*Musnad Aḥmad ibn Ḥanbal*) は権威あるハディース集として広く認められている。
- 6 イブン・カイイムは、グラバーを「人々が欠けたときに増やす者」であるとするアハマド・ブン・ハンバルの伝承が正しいのだと考えており、ある伝承——「人々が増えたときに減らす者」では、意味が逆であるとして、このハディースは誤りであると退けている。強調筆者。
- 7 Aḥmad, *MAH*, 3785 (q.v.); Tirmidhī, *JS*, 2629 (q.v.). 真正なハディース。[MS, 89I]
ティルミズイー (Abū ʿĪsā Muḥammad b. ʿĪsā al-Sulamī al-Ḍarīr al-Būghī al-Tirmidhī, d. 279/892) は、ベルシャのテルミーズ生まれのハディース編纂者で、“*Al-Jāmiʿ al-Ṣaḥīḥ (Al-Jāmiʿ Tirmidhī)*” は六大書の一冊に数えられる権威あるハディース集成である。なお、個々のハディースは後代の学者たちの手により信憑性に応じてランク付けされており、(本稿で言及されているものは) 信頼性の高い順に「真正 (ṣaḥīḥ)」、「良好 (ḥasan)」、「脆弱 (ḍaʿif)」がある。
- 8 Aḥmad, *MAH*, 6650, 7072 (q.v.); Ṭabarānī, *al-Awsaṭ*, 2629 (q.v.). 良好なハディース。[MS, 89I]
タバラーニー (Abu al-Qāsim Sulaymān b. Ayyūb b. Muṭayyir al-Lakhmī al-Ṭabarānī, d. 360/971) は、ハンバル学派のハディース編纂者で、イスラーム文明世界各地を旅しながら研鑽を積んだことでも知られる。引用元は、“*Al-Muʿjam al-Awsaṭ*” というハディース集成。
- 9 Aḥmad, *al-Zuhud*, 149 (q.v.); Bayhaqī, *al-Zuhud al-Kabīr*, 206 (q.v.). 脆弱なハディース。[MS, 89I]

バイハキー (Abū Bakr Aḥmad b. al-Ḥusayn al-Bayhaqī, d. 458/1066) は、ホラーサーン地方のバイハク出身の法学・ハディース学の学者で、著書に、シャーフィイー学派の法学書 (al-Mabsūt) や、自身が編纂したハディース集成 (*Sunan al-Bayhaqī*) がある。ここで引用されている『大禁欲主義の書 (*Kitāb al-Zuhud al-Kabir*)』は、表題の通り、禁欲主義について論じたものである。

- 10 Quḍā'i, *Musnad al-Shahāb*, 1053 (q.v.). [MS, 891]
アル＝クダーイー (Abū 'Abdullāh Muḥammad b. Salāmah b. Ja'far b. 'Alī al-Quḍā'i, d. 454/1062) は、エジプト出身のシャーフィイー学派の歴史家で預言者とカリフについての歴史書で有名。
- 11 Ājurri, *Ṣifāh al-Ghurabā*, 38 (q.v.). われわれの師 (al-Albānī) が『*Silsilah al-Aḥādīth al-Ḍa'īfah*, 1850 (q.v.)』で述べているように、異なる文言の伝承がある。[GG, 64; Ibn Mājah, SIM, 3989 (q.v.); Ṭabarānī, *al-Ausāf*, 7112 (q.v.)]. 脆弱なハディース。[MS, 892]
GG版64頁の原註には、アージュッリー『奇妙な者たちの特徴 (*Ṣifāh al-Ghurabā*)』と記しているが、同書は『奇妙な者たちの書 (*Kitāb al-Ghurabā*)』として知られる。一方、サウディアラビアの現代イスラーム学者サルマーン・アル＝オウダ (Salmān b. Fahd al-'Audah, b. 1955) が同名の『奇妙な者たちの特徴 (*Ṣifāh al-Ghurabā*)』という著書を上梓しており、彼の『アル＝グラバー論集 (*Rasā'il al-Ghurabā*)』の第二巻として公刊されている。サルマーン・アル＝オウダはサウディアラビアのイマーム大学にてイスラーム法学の分野で博士号を取得した学究で、ムスリム学者国際連盟 (al-Ittiḥād al-'Ālamī li-'Ulāmā' al-Muslimīn) の理事や、多くの視聴者を持つイスラーム・トゥデイの運営やテレビコメンテーターなどを務めた著名人である。アル＝オウダは反政府組織を率いたとして1994年に投獄され、その後も2017年に拘束されている。2018年9月には、サウディ政府主導のカタール断交を支持する特定の声明を発出することを拒んだことで逮捕されていた彼に、サウディアラビア検察は死刑を求刑した。この一件は、現代サウディアラビアの宗教と政治の関係を表す一例として興味深い事案であるが、本稿の主題とは異なるためここでは措く。
- 12 ここで言われているグラバーは、預言者のハディースで言及されている幸せあるところの「奇妙な者たち」のことではなく、単に語の原義に近い「ストレンジャー」たる多数派のグラバーであり、彼らは単に「アッラーや使徒、イスラームから疎遠である」という点におけるグラバーである。要するに、ムスリムのなかでも、真の信仰者である少数のグラバーと、アッラーと信仰に疎遠な大多数の人々（疎遠という意味で語義に忠実なグラバー）の二種類に大別されるのだが、マジョリティである後者から見ると、前者は狂信的な奇妙な連中ということになるのだが、このハディースではその意味が逆転している。ここでは二重の意味が塗り重ねられている「グラバー」という語の訳語を、煩雑さを避けるためにこの節に限っては、多数派のグラバーを前節の聖句で指示された「彼の人々」と訳した。
- 13 この詩で言われている「ガリーブ」は、註5で明らかにした「宗教から遠ざかっている」疎遠性のグルバであることを指している。
- 14 アビー・サイド・アル＝ハドリー・アル＝タウィールのハディースの一部、アル＝ブハーリー (『ファトフ』13巻、420－422を参照。[GG, 66])
訳註：終末では最後の審判を前にして、偽の神々が現れる。人々（不信仰者）はそこに自分の理想を投影した神の姿をみいだし、その偽りの神々について行く。しかし、このハディースで暗示されているように、真の信仰者は偽りの神々に右往左往することなく、唯一神アッラーを待つ。
なお、『ファトフ』とはアスカラーニーのブハーリー註解書のこと。詳しくは註51を参照されたい。
- 15 「背中が軽い」というのは「罪が軽い」ということであり、「手には一握りの糧があり」というのは「清貧である」ということ。
- 16 Tirmidhī, vol.3, 97; Aḥmad, vol.5, 252-255; Ṭayālisī, 2082 (q.v.); Abū Nu'aym, *al-Hilyah*,

- vol.1, 25; Baghawī, *Sharḥ al-Sunnah*, vol.14, 246; Ḥakīm, vol.4, 123. 上記では真正ハディースとされているが、アル＝ザハビーによるとこれは脆弱なハディースである。私は、このハディースはとても脆弱なものであると考える。また、アリー・ブン・ヤズィード・アル＝アルハーニーはこれを唾棄している。私の論考『*al-Shihāb al-Thāqib*』を参照せよ。イブン・マージャの4117番で、サダカ・ブン・アブドゥッラーの伝承経路は、このハディースが脆弱であることに同意している。この脆弱さの強調という観点において、これら二つの伝承経路は互いに〔信頼性を〕強めない。[GG, 66f; Aḥmad, *MAH*, 22167 (q.v.); Tirmidhī, *ST*, 2347(q.v.). とても脆弱なハディース。[MS, 893]
- タヤーリスィーは、ハディース編纂者アブー・ダーウード (Abū Dāwūd Sulaymān b. Dāwūd b. al-Dj_ārūd al-Ṭayālīsī, d. 203/819) のことである。
- 17 原註：Tirmidhī, 3854 (q.v.); Abū Nu'aym, *Ḥilyah* を参照せよ。これは真正ハディースである。ムスリム他〔に収録〕のアブー・フライラによるハディースを見よ。[GG, 67; Muslim, *SM*, 6682 (q.v.). [MS, 893]
- アブー・ヌアイム (Abū Nu'aym Aḥmad b. 'Abdullāh b. Aḥmad b. Ishāq b. Mūsā b. Mihrān al-Shafī'i al-Isfahānī, d. 430/1038) は、初期イスラームにおける神秘家についての伝記で有名な、中世ペルシヤの学者である。引用元の“*Ḥilyah al-awliya'*”は650人もの伝記が記してある浩瀚な人名録となっている。
- 18 Ājurrī, *Ṣifah al-Ghurabā'*, 9 (q.v.). この意味で、Ibn Mājah, 4115 (q.v.) に収録されている。スワイド・ブン・アブドゥルアズィーズのハディースだが、真正ではない。[GG, 67; Ibn Mājah, *SIM*, 4115(q.v.). アルバーニーによると脆弱なハディースである。[MS, 893]
- アルバーニーとは、アルバニア出身のハディース学者、ムハンマド・アル＝アルバーニー (Muḥannad Nāṣir al-Dīn al-Albānī, d. 1999) を指す。アルバーニーは20世紀を代表する学者のひとりで、ハディースの信頼性を分析した一連の研究がある。Cf. Muḥannad Nāṣir al-Dīn al-Albānī, *Silsilah al-Aḥādīth al-Ḍa'īfah wal-Maw'u'ah*. 14 vols. Riyāḍ: Maktab al-Ma'ārif, 1992; この他、アブー・ダーウード、ティルミズィー、イブン・マージャのハディース集成に収録されている個々のハディースの信頼性について検討した著書など多数。
- 19 アル＝ハサンと言えば、初期イスラーム世界を代表する思想家ハサン・アル＝バスリー (Abū Sa'id b. Abi al-Ḥasan Yasār al-Baṣrī, d. 15/728) を指す。イスラームでは、預言者ムハンマドと同時代を生きた第一世代 (al-ṣaḥābah, 教友) と、預言者の死後に教友と関係のあった第二世代 (al-tābi'ūn, 追隨者) の時代を理想とする (「最善の世代はわたしが遣わされた世代であり、次いでそれに継ぐ世代であり、次いでそれに継ぐ世代である」というハディースがある)。ハサン・バスリーは預言者が死去してから10年が経過した西暦642年 (21 A.H.) に生まれた第二世代に属する。彼は特にその敬虔さと禁欲主義で有名であり、イブン・カイムが引用しているこの一節にも彼の禁欲的な側面が見られる。彼の弟子に、ムウタズィラ神学派の学祖ワースィル・イブン・アター (Wāṣil b. 'Atā', d. 131/748) やアムル・イブン・ウバイド ('Amr b. 'Ubayd b. Bāb, d. 143/761) などがある。ハサン・バスリーについては、例えば竹下の研究 (竹下政孝「ハサン・バスリーとイスラーム思想の起源」『中東協力センターニュース』35巻 (2010) : 82-87) が簡潔にまとまっている。
- 20 ここで「新しいもの」と訳出しておいた「ビドア bid'ah」という語は、文脈によっては「異端」と訳したが、ここでは原義に従って「新しいもの」と訳した。西暦8世紀に啓示が下されたイスラームにとって、人々に知られている (= 流行している) 新しいもの、ないしは宗教における革新は「異端」である、という意味。
- 21 ゴロアスター教のこと
- 22 大勢の群衆が入信し、イスラームが奇妙 (gharīb) でなくなると、奇妙な者たち (ghurabā') から奇妙さが消え、始まりのときと同じような奇妙なものに戻るまで、イスラームの疎外と改変が行われる。
- 23 ここで言われている「象徴」とは街のいたるところで目にするモスクや宗教的装飾でかざられたシンボリックな物の数々であり、「(形だけの) 儀礼」とは礼拝やラマダーン月、轎

- 牲祭等での人々の振る舞いのことである。つまり、これら「イスラーム文化」とでも言うべきものが人々のあいだで知られ共有されていたとしても、今日において真のイスラームはグルバであり、その民（グラバー）は人々のあいだで疎外されている。
- 24 イスラームは七三の分派に分かれ、そのうちの一つが栄光に預かるとされる。もっとも、イブン・カイイムはグラバーたる小集団こそがその一派であると考えている。
- 25 私は彼（預言者）がこの言葉を言ったとは思わないが、アージュッリーは前述の『奇妙な者たちの書』でこの一節を持ち出している。イブン・カイイムはこのアージュッリーの著書を引いているものと思われる。[GG, 70]
- 26 スンナ派のハディース集で最も権威のある六冊を「六大書 (al-kutub al-sittah)」といい、『ブハーリー真正集』 (*Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*)、『ムスリム真正集』 (*Ṣaḥīḥ Muslim*)、『スナン・アブー・ダーウード (Sunan Abū Dāwūd)』、『スナン・アル＝ティルミーズィー』 (*Sunan al-Tirmidhī, a.k.a. Al-Jāmi' al-Tirmidhī*)、『スナン・アル＝ナサーイー』 (*Sunan al-Nasā'ī, a.k.a. Al-Sunan al-Ṣuḡhrā*)、『スナン・イブン・マージャ』 (*Sunan ibn Mājah*) の六冊を指す。なお、「両真正集 (Ṣaḥīḥayn)」と指示する場合、ブハーリーとムスリムのハディース集成を指す。
- 27 SAD, 4341 (q.v.); JS, 3058 (q.v.). [MS, 894]
- 28 Abū Dāwūd, 4341 (q.v.); Tirmidhī, 3058 (q.v.); Ibn Mājah, 4014 (q.v.); Ibn Jarīr, *Tafsīr*, vol.7, 97; Ibn Waḍḍāḥ, *Al-Bid'ah*, 71, 76f; Ibn Ḥibbān, *Mawāriḍ*, 1850 (q.v.); Ṭaḥāwī, *Mushkil al-Āḥāl*, vol.2, 65; Ḥākim, vol.4, 322; アル＝ザハビーとアブー・ヌアイム『装飾 (*al-Ḥilyah*)』2巻30、そしてアル＝バガウィー『スンナ註釈 (*Sharḥ al-Sunna*)』14巻348は、これらは正しいと同意している。だが、私はこの伝承経路は脆弱であると考え、これについてウタイバ・ブン・アビー・ハキームはその真正性は大きな間違いであるとし、[対照的に] アブー・ウマイヤ・アル＝シャアバーニーは受け入れられるものとしている。とはいえ、このハディースの最後の部分は真正であるだろう。その簡潔な説明は自著『織を掴む者たち (*al-Qābiḍūn 'alā al-Jamr*)』の一部において取り上げている。[GG, 70f; アルバーニーによると脆弱なハディース。[MS, 894]
- イブン・ヒッバーン (Abū Ḥātim Muḥammad b. Ḥibbān b. Aḥmad al-Bustī, d. 354/917) は、ホラーサーン地方のブスト出身のシャーフィイー学派のハディース学者、さまざまな分野で多くの業績を残したが、みずから編纂したハディース集成『サヒーフ・イブン・ヒッバーン (*Ṣaḥīḥ ibn Ḥibbān*)』が主著とされる。アル＝タハーウィー (Aḥmad b. Muḥammad b. Salāma b. 'Abd al-Malik al-Azdī al-Ṭaḥāwī, d. 321/933) は、エジプト出身のハディース学者・法学者で、ハディース学と法学の黎明期を過ごし、4大法学派の学祖に直接的、間接的に薫陶を受けた。
- 29 Bukhārī, *Fath*, vol.11, 233. [GG, 73]; Bukhārī, *SB*, 6416 (q.v.); Aḥmad, *MAH*, 4764 (q.v.); Tirmidhī, *JS*, 2333 (q.v.). [MS, 895]
- 30 語根G-R-Bの動名詞（第VIII型）で語義は故郷から離れること、不在にすること、異国にいること。転じて、移住、疎外、異邦人であること（英：foreignness）等も意味する。
- 31 'Aqīlī, *Kitāb al-Du'afā'*, vol.2, 288; Ibn al-Jawzī, *al-'Ilal*, 1487ではこう言われている。「アブー・ラジャーはこのハディースを否定している。これについては異論があるが、それらは脆弱さにおいて大同小異である」。私はこれには証明がないと考える。cf. Al-Ḥāfiẓ al-Mundhirī, *al-Tarḥīb wal-Tarḥīb*, vol.3, 87; Ibn Ḥajar, *al-Talkhīṣ wal-Ḥabīr*, vol.2, 141f; Ibn al-Jawzī, *al-'Ilal*, vol.2, 890ff. [GG, 75]
- アキーリー (Abū Ja'far Muḥammad b. 'Amr b. Mūsā b. Ḥamad al-'Aqīlī, d.322/934) は、『*Kitāb al-Du'afā'*』の著者。イブン・アル＝ジャウズィー (Abū al-Faraj 'Abd al-Raḥmān b. 'Alī b. Muḥammad b. al-Jawzī, d. 597/1200) は、ハンバル学派の歴史家、裁判官、説教師として12世紀にバグダードで活躍した人物で、膨大な数の歴史書を著したことで有名。
- 32 これは（アル＝バジャリーではなく）アル＝フブリー ('Abdullah b. Yazīd al-Mu'āfirī) のことである。[MS, 896]

- 33 Aḥmad, *MAH*, 6656 (q.v.); Ibn Ḥibbān, *SIH*, 2934 (q.v.). 脆弱なハディース。[MS, 896]
 生まれた場所から死んだ場所までの距離に応じて褒賞が変わる、ということが明示されている。
- 34 al-Nasā'ī, vol.1, 259; Ibn Mājah, 1614 (q.v.); Ibn Ḥibbān, *Mawāriḍ*, 729 (q.v.); Aḥmad, vol.2, 177; ハイイ・ブン・アブドゥッラー・アル＝マア＝フィリーがアビー・アブドゥルラフマーン・アル＝フブリーがアブドゥッラー・ブン・ウマルに伝えたところのハディース。私はこの伝承経路は良好であると考え、これら伝承者は信頼に足るものだからだ。ただしハイイ・ブン・アブドゥッラーは除く。だが、ほかの者らはその記憶において正確で、容易に語るため、このハサンの評価を毀損するものではないだろう、インシャアッラー。[GG, 76]
- 35 奇妙な者たちのハディースの伝承の続きがある。[GG, 77]; Aḥmad, *al-Zuhud*, 149; Ājuri, *al-Ghurabā'*, 37. 脆弱なハディース。[MS, 896]
- 36 スーフイズムの用語のため、ここでは「状態」と訳しておくが、「心境」といった含意がある。
- 37 ここで批判が注がれているのは、誤った知識で民を迷わせる学者とそれに盲従する民である。イブン・カイイムは、アッラーの啓示と預言者の言行を疎かにして「これはハラール」「あれはハラーム」と迷妄したファトワーを下す学者と、聖典＝テキストよりも、その学者の判断に付き従う人々のことをこの節で批判している。

補遺——アンサーリー・ハラウィー『旅路を行く者』ゲルバ章

- 38 翻訳にあたって、Sheikh al-Islām 'Abd Allāh al-Anṣārī al-Harawī. *Kitāb Manāzil al-Sā'irin*. (Beirut, 1988/1408) pp. 108-109. を底本とし、Sheikh al-Islām Abū Ismā'il 'Abd Allāh bn Muḥammad al-Anṣārī al-Harawī. *Kitāb Manāzil al-Sā'irin: ilā al-Ḥaqq 'Izz tha'anih*. (Cairo, 1966/1386) p.38. と照合した。

解題

- 39 イブン・タイミーヤの略歴については、拙稿（石郷岡、前掲論文、187ff）を参照されたい。イブン・タイミーヤの政治論については中田考の邦訳がある（中田考『イブン・タイミーヤ政治論集』作者考、2017）。最近の研究に、イブン・タイミーヤ研究者のジョン・フーヴァーによるモノグラフがある（Jon Hoover, *Ibn Taymiyya*, London: Oneworld Academic, 2020）。また、後世に編纂された全集が刊行されている（Taqiyyūddīn Aḥmad b. Taymiyah, *Majmu'ah al-Fatāwā li-Sheikh al-Islām*, 20 vols. Beirut: Dār ibn Ḥazm, 1997）。
- 40 al-Shāṭibī, “Kalām al-Shāṭibī fi al-Ghurbah wal-Ghurabā',” in *al-Ghurbah wal-Ghurabā'*, Salīm b. 'Īd al-Hilālī (ed.), Dammam: Dār al-Hijrah lil-Nnashr wa al-Tūziā', 1989. pp.83-101. シャーティビーは本名を 'Ibrahīm b. Mūsā b. Muḥammad al-Shāṭibī al-Gharnāṭī' といい、詳しい出自については史料が残っていないが「シャーティビー」という名が示すようにアンダルスのシャティバ（Xativa/Jativa、現在のスペイン王国バレンシア州ハティバ）出身と考えられている。シャーティビーはイスラーム法学基礎論（uṣūl al-fiqh）の分野で知られ、主著に、シャリーアの目的（maqāṣid）と公益（maṣlahah）概念を定式化した『シャリーア原理の調和（*Al-Muwāfaqāt fi Uṣūl al-Shari'ah*）』、イスラームにおけるビドアについて論じた『遵守（*Al-I'tisām*）』がある。「ゲルバ」についての叙述は、『遵守』に収録されている。Cf. Ibrahīm b. Mūsā al-lakhamī al-Shāṭibī, *Al-Muwāfaqāt fi Uṣūl al-Shari'ah*, Beirut: Dār al-Kitāb al-'Ilmiyah, 2004; Ibrahīm Ibn Al-Shatibi, *The Reconciliation of the Fundamentals of Islamic Law: Al-Muwāfaqāt fi Usul al-Shari'a*, Imran Ahsan Khan Nyazee (trans.), 2 vols. Reading: Garnet Publishing, 2012; Muḥammad al-Shāṭibī al-Gharnāṭī, *Al-I'tisām*, 3 vols. Al-Maktabah al-Tajārīyah al-Kabrā', s.l.n.d.
- 41 石郷岡、前掲論文、177-204.

- 42 イブン・カイイムはイスラーム諸学のあらゆる分野で業績を残しており、彼独自の思想を構築することに成功しているが、その筆跡のなかには、イブン・タイミーヤが与えた論理や知見、ファトワーや書翰での主張を見出すことができる。(v. Josef W. Meri (ed.), *Medieval Islamic Civilization: An Encyclopedia*, vol. I, Ibn Qayyim al-Jawziyyah [q.v.], by Livnat Holtzman, New York: Routledge, 2006, p.363.)
- 43 Ibid, p.362.
- 44 Ibid.
- 45 アシュアリー派やハディースの徒の思想的差異については、松山洋平『イスラーム神学』（作品者、2015）を参照されたい。森山央朗によると、「ハディースの徒」には二つの潮流があり、ひとつが「ハンバル法学派に連なり、ハディースが伝えるスンナからの逸脱を厳しく批判する急進的伝承主義の潮流」であり、もうひとつは「シャーフィイー法学派に連なり、ハディースの解釈・操作を通して現状をスンナに結びつけて肯定する潮流」である（森山央朗「スンナ派の宗派形成とイスラーム主義の系譜」『中東情勢・新地域秩序』日本国際問題研究所、2016年、27頁）。イブン・タイミーヤやイブン・カイイムらハンバル学派の法学者の神学的立場として「ハディースの徒」と名指す場合、前者を指す。
- 46 Meri (ed.), *op.cit.*, p.363. 例としてホルツマンは次の著作を挙げている。v. Ibn Qayyim al-Jawziyyah, *Shifā' al-'Alīl fī masā'il al-Qaḍā' wal-Qadar wal-Ḥikma wal-Ta'ālil*, Cairo: al-Matba'a al-Husayniyya, 1903. イブン・カイイムはイブン・タイミーヤのすべての見解に無条件で追従していたのではなく、見解の相違も多く見られる点に留意されたい。
- 47 「旅人の宿駅（The Stations of the Travelers）」という訳もある。括弧内の文言はクルアーンの章句（1：5）。
- 48 Joseph N. Bell, *Love Theory in Later Ḥanbalite Islam*, New York: State University New York Press, 1979. pp.98-101.
- 49 Ovamir Anjum, “Sufism Without Mysticism? Ibn Qayyim al-Ġawziyyah's Objectives in Madāriġ al-Sālikin,” *Oriente Moderno*, XC/1 (2010): 166.
- 50 アンジュムによる英語の訳注付完訳本がブリル社のイスラーム翻訳シリーズとして2020年5月に刊行予定。v. Ovamir Anjum, *Ranks of the Divine Seekers*, I, Leiden: Brill, 2020 (forthcoming).
- 51 イブン・ラジャブはイラクのバグダード生まれ、5歳のときに家族と共にダマスカスに移り住んだ。彼の父は学者の家系に出身のハディース学者であった。イブン・ラジャブは数人の学者のもとで学んだ後、イブン・カイイムに師事し、彼が死去するまで共に学んだ。主著であるナワウイーのハディース註解書『知識と智慧の概要（*Jāmi' al-'Ulūm wa al-Ḥakam*）』は英訳が出版されている（cf. Imām Ibn Rajab al-Ḥanbalī, *Compendium of Knowledge and Wisdom*, Abdassamad Clarke (trans.), London: Turath Publishing, 2007）。また、死の直前まで取り組んでいたブハーリー註解書『創造者の勝利（*Faṭḥ al-Bārī*）』は未完のまま遺されたが、彼の死後20年を経てエジプトのイスラーム学者アスカラーニー（Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, d. 852/1449）が浩瀚なブハーリー註解書を上梓し、イブン・ハジャルに敬意を表して『創造者の勝利』の名を冠した（cf. Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Faṭḥ al-Bārī fī Sharḥ Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*, 13 vols., Beirut: Dār al-Kutub al-'ilmīyah, 1989. 本書はナワウイー（Abū Zakariyya Yaḥya b. Sharaf al-Nawawī, d. 676/1277）の『ムスリム真正集訳（*Sharḥ Ṣaḥīḥ Muslim*）』と並ぶハディース註解書の最高峰のひとつに数えられる。
- 52 'Abd al-Raḥmān b. Aḥmad b. Rajab, *Al-Dhayl 'alā Ṭabaqāt al-Ḥanābilah*, Sulaymān b. Muḥammad al-'Uthaymin (ed.), Macca: Maktabah al-'Abikān, 2004, V, p.172.
- 53 イブン・カイイムの伝記は少なく、主な典拠となる古典的な史料だと、イブン・ラジャブ（*op.cit.*, pp. 170-179）やアスカラーニー『8世紀の著名人についての隠された真珠』（Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Al-Durar al-Kāminah fī A'yān al-Mī'ah al-Thāminah*, V, Hyderabad: Dār al-Naṣr, 1972, p. 137ff）、イブン・カスィール『創生と終末』（Ibn Kathīr, *Al-Bidāyah wal-Nihāya*, XIV, Beirut: Dār al-Naṣr Maktabah al-Ma'ārif, n.d., p. 234）、イブン・イマー

- ド (Ibn al- 'Imād, *Shadharāt al-Dhahab*, Damascus: Dār al-Naṣr Dār Ibn Kathīr, 1985, VI, p.168)、サラーフッディーン・アル=サファディー (Salah al-Din al-Ṣafādī, *Kitāb al-Wafī bi-l-Wafayāt*, II, Beirut: Dār Iḥyā 'al-Turāt, 2000, p. 195f) が挙げられる。
- 54 Ibid.,172f.
- 55 Anjum, *loc.cit.*
- 56 Meri (ed.), *loc.cit.*
- 57 Joseph N. Bell, *op.cit.*, p.103.
- 58 イブン・カシールは1300年 (701 A.H.) 頃にダマスカスより東にあるボスラ近郊の村ミジダルに生まれ、イブン・タイミーヤと歴史家・ハディース学者のアル=ザハビー (Ibn al-Dhahabī, d. 748/1348) に学んだ歴史家・註釈学者・法学者である。浩瀚な歴史書 (*Al-Bidāyah wal-Nihāyah* 『創生と終末』) は高名で、クルアーンの註解書 (*Tafsīr al-Qur 'ān al- 'Aẓīm Tafsīr ibn Kathīr* 『威光高きクルアーンの註釈』) はアル=タバリーの註解書 (*Jāmi 'al-Bayān 'an Ta 'wil āy al-Qur 'ān*) に次ぐ権威のスナ派のクルアーン註解書としても名高い。
- 59 Ovamir Anjum, “Steps of the Seekers (Madarij al-Salikin): Translator’s Introduction,” al-Jumuah, May 29, 2016. <https://aljumuah.com/introduction-to-ibn-al-qayyimmadarij-al-salikin/> (Retrieved February 10, 2020); cf. Ibn Kathir, *al-Bidāyah wal-Nihāyah*, XIV, p.235.
- 60 Meri (ed.), *loc.cit.*

謝辞

本稿の訳出にあたって、中田考氏に訳文の確認や有益な助言を多く頂いた。ここに記して謝意を表したい。ただし、内容や翻訳の誤りはすべて訳者の責任に帰される。

参考文献

〈翻訳原典〉

- Ibn Qayyim al-Jawziyah. *Al-Ghurbah wal-Ghurabā'*. Salim b. 'Iid al-Hilālī (ed.). Dammam: Dār al-Hijrah lil-Nnashr wa al-Tūziā', 1989.
- Ibn Qayyim Jawziyah. *Madārij al-Sālikīn bayna Manāzil Iyyāka Na'budu wa Iyyāka Nasta'in*. Beirut: Resalah Publishers, 2014.
- al-Harawī, 'Abū Ismā'īl 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Anṣārī. *Kitāb Manāzil al-Sāi'rīn: ilā al-Ḥaqq 'Izz tha'anih*. Beirut: 1988.
- al-Harawī, 'Abū Ismā'īl 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Anṣārī. *Kitāb Manāzil al-Sā'i'rīn: ilā al-Ḥaqq 'Izz tha'anih*, Cairo: 1966.

〈外国語文献〉

- al-Albānī, Muḥammad Naṣir al-Dīn. *Silsilah al-Aḥādīth al-Ḍa'ifah wal-Maw'ū'ah*. 14 vols. Riyāḍ: Maktab al-Ma'ārif. 1992.
- al-Ājurri, Muḥammad b. al-Ḥusayn. *Kitāb al-Ghurabā'*. Kuwait: Dār al-Khulafā' lil-Kitāb al-Islāmī. 1983.
- . *Kitāb al-Sharī'ah*. Bayrūt: Mu'assasah al-Rayyān lil-Ṭibā'ah wal-Nashr wal-Tawzī', 2008.
- 'Aqīlī, Abū Ja'far Muḥammad. *Kitāb al-Ḍu'afā' al-Kabīrat*. 6 vols. Beirut: Dār al-Kutub 'Ilmiyah,
- Anjum, Ovamir. "Sufism Without Mysticism? Ibn Qayyim al-Ġawziyyah's Objectives in Madāriġ al-Sālikīn." *Oriente Moderno*. XC/1 (2010): 166-188.
- Bayhaqī, Aḥmad b. al-Ḥusayn. *Kitāb al-Zuhud al-Kabīr*. Beirut : Dār al-Jinān : Mu'assasah al-Kutub al-Thaqāfiyah, 1987.
- Bell, Joseph N. *Love Theory in Later Ḥanbalite Islam*. New York: State University New York Press, 1979.
- Bn Ḥanbal, Aḥmad. *Kitāb al-Zuhud*. Cairo: Dār al-Nahḍah al-'Arabiyah, 1981.
- Hoover, Jon. *Ibn Taymiyya*. London: Oneworld Academic, 2020.
- Ibn Ḥajar al-'Asqalānī. *Fath al-Bārī fi Sharḥ Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*. 13 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'ilmiyah, 1989.
- Ibn al-'Imād al-Ḥanbalī, Abū al-Falāḥ 'Abdulḥayy b. Aḥmad. *Shadharāt al-Dhahab fi Akhbār man Dhahab*. 10 vols. Damascus: Dār al-Naṣr Dār Ibn Kathīr, 1985.
- Ibn al-Jawzī, *Al-'Ilal al-Mutanāhiyah fi al-Aḥādīth al-Wāhiyah*. 2 vols. Beirut: Dār al-Kutub 'Ilmiyah, 1983.
- Ibn Kathīr. *Al-Bidāyah wal-Nihāyah*. 14 vols. Beirut: Dār al-Naṣr Maktabah al-Ma'ārif, n.d.
- . *Tafsīr al-Qur 'ān al-'Aẓīm Tafsīr ibn Kathīr*. 4 vols. Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmiyah, 1998.
- Ibn Qayyim al-Jawziyyah. *Shifā' al-'Alīl fi masā'il al-Qaḍā' wal-Qadar wal-Ḥikma wal-Ta'alīl*. Cairo: al-Matba'a al-Husayniyya, 1903.
- Ibn Rajab, 'Abd al-Raḥmān b. Aḥmad. *Al-Dhayl 'alā ṭabaqāt al-ḥanābilah*, Sulaymān b. Muḥammad al-'Uthaymin (ed.), Macca: Maktabah al-'Abikān, 2004.
- . *Jāmi' al-'Ulūm wa al-Ḥakam*. Houston: Dar-us-Salam Publications, 2008.
- . *Compendium of Knowledge and Wisdom*. Abdassamad Clarke (trans.). London: Turath Publishing, 2007.
- Meri, Josef W. (ed.) *Medieval Islamic Civilization: An Encyclopedia*. 2 vols. New York: Routledge, 2006
- Meri, Josef W. (ed.) *Medieval Islamic Civilization: An Encyclopedia*. 2 vols. New York:

- Routledge, 2006
- Quḍā'i, Muḥammad b. Salāmah. *Musnad al-Shahāb*. Beirut: Mu'assasah al-Risālah, 1985.
- Ibn Taymiyah, Taqiyuddin Aḥmad. *Majmu'ah al-Fatāwā li-Sheikh al-Islām*. 20 vols. Beirut: Dār ibn Ḥazm, 1997.
- al-Shāṭibī, Ibrahim b. Mūsā al-lakhamī. *Al-Muwāfaqāt fī Uṣūl al-Sharī'ah*, Beirut: Dār al-Kitāb al-'Ilmiyah, 2004.
- . *The Reconciliation of the Fundamentals of Islamic Law: Al-Muwafaqat fi Usul al-Shari'a*. Imran Ahsan Khan Nyazee (trans.). 2 vols. Reading: Garnet Publishing, 2012.
- . *Al-I'tisām*, 3 vols. Al-Maktabah al-Tajāriyah al-Kabrā, s.l.n.d.
- al-Ṣafadī, Salah al-Dīn. *Kitāb al-Wāfi bi-l-Wafayāt*. 29 vols. Beirut: Dār Iḥyā' al-Turāth al-'Arabī, 2000
- al-Ṭabarānī, Abu al-Qāsim Sulaymān. *Al-Mu'jam al-Awsaṭ*. 7 vols. Beirut: Dār al-Kutub 'Ilmiyah, 2012.
- al-Ṭahāwī, Abū Ja'far Aḥmad. *Sharḥ Mushkil al-Āthāl*. Shu'ayib al-Arnawūṭ (ed.) 16 vols. Bairut: Al-Risālah al-'Alamiyāt, 2010.

〈日本語文献〉

- 石郷岡宏記「〈奇妙なもの〉と〈奇妙な者たち〉——イブン・タイミーヤ『ファトワー集成』より「奇妙な者たちに幸せあれ」ハディース註解論考の翻訳と解題」『同志社グローバル・スタディーズ』VIII (2018) : 177-204.
- 竹下政孝「ハサン・バスリーとイスラーム思想の起源」『中東協力センターニュース』35巻 (2010) : 82-87.
- 中田考「イスラーム『復興』運動の理念—イブン・タイミーヤのハディース注釈を手がかりに—『イスラームは少数派として始まった』ハディース注釈の解説をかねて」『日本サウディアラビア協会報』CXXXVII (1988) : 4-11
- .『イブン・タイミーヤ政治論集』(作品社、2017) .
- 松山洋平『イスラーム神学』(作品者、2015)
- 森山央朗「スンナ派の宗派形成とイスラーム主義の系譜」『中東情勢・新地域秩序』日本国際問題研究所、2016年.

Abstract

Strangeness and Strangers: A Translation and Introduction of a Ḥadīth Commentary on ‘Blessed Are the Strangers’ from Ibn Qayyim’s *Madārij al-Sālikīn*

Koki Ishigohoka

This article demonstrates the different conceptual and theoretical approaches underlying the interpretations of strangeness and strangers (*al-ghurbah wal-ghurabā’*) through the differences in ideas of *ghurabā’* between the medieval Ḥanbalite jurist Ibn Taymiyyah (d. 728/1328) and theologian Ibn Qayyim al-Jawziyyah (d. 750/1351).

This paper presents a coherent picture of the concept of *ghurabā’* in Islamic thought. As the first step in a more extensive study of this idea, this paper introduces and translates Ibn Qayyim’s commentary on the *ḥadīth*, “Islam began as something strange, and it will return to being strange as it began, so the blessed are strangers.” In his commentary, which appears in his best-known and most developed spiritual work *Madārij al-Sālikīn*, Ibn Qayyim represents the *ghurabā’* through a display of a range of *ḥadīth* narrations related to the subject. This work presents an explicit representation of the *ghurabā’* that is entirely different from that presented by jihadists who view themselves as the *ghurabā’* who will inherit the kingdom of Allah and receive victory from him.

This paper also provides a comparison of Ibn Qayyim’s thesis with Ibn Taymiyyah’s commentary on the same *ḥadīth*, presenting the differences in their conceptual and theological approaches and interpretations. Ibn Taymiyyah connects his interpretation of this *ḥadīth* with a call for *jihād* in his *Risālah*, whereas Ibn Qayyim produces an in-depth philosophical analysis of three degrees of the *ghurbah*.

In addition to an annotated translation of the text of this article, “*Madārij*,” which constitutes Ibn Qayyim’s commentary on the *sufī* manual *Manāzil al-Sai’rīn*—authored by the eleventh-century Ḥanbalite mystic Anṣārī al-Harawī

(d. 481/1089), a translation of “Chapter 77, *Al-ghurbah*” of al-Harawī’s *Manāzil* is given as an appendix.

